

日本民衆史に残る被災の体験

東日本大震災は千年に一度という経験で、このとき庶民が何を考え、何を訴えたかを知ることは、私たち民衆史に携わるものにとって極めて重要な機会である。本書は巨大な地震、大津波、原発事故に遭遇した71人の被災者が、直後に万感の思いをこめて記録したものだけに特別の価値をもつ。

「おじいさんはへ好きな海に帰つたんだ」と祈るように記した宮城県石巻市の丹野さん、「祖母の手を放してしまつた」と悔恨の情をつづった七ヶ浜町の渡辺さん、「夢半ばで逝つた息子を想う」とつ

づつた名取市の小原さん、津波に流されながら生き延び、「供養碑の下の石を拾い集める日々」を書いた岩手県大船渡市の及川さんの記録などは、未曾有の体験だけにその価値は日本民衆史に残るものである。

また、いまだに解決のメドさえ立つていらない福島原発の事故について、19編の証言や訴え、告発などが胸を打つ。

「果てなき流浪へ」（福島県浪江町の新田さん）、「眞実は避難者には知らされない」（南相馬市の池田さん）、「政府も誰も信用できない」（福

う悲しい訴えであろうか。

この記録には仙台市での地震の経験も記されている。とくに高層マンションでの震度6の揺れの報告は、首都直下型大地震が近いとささやかれている今、それに備える人々には見過ごせないだろう。そ

うした事態に備える行政の準備は大丈夫だろうか。市民ひとりひとりの心構えも問われている。

記録という点から言えば、大地震と大津波で家を離れた20万人とも30万人ともいわれる避難民の人たちにも、この本に倣つた被災の経験を書き残してほしいと思う。

（新曜社、2940円）



編者は1975年、大阪府生まれ。東北学院大准教授。本書は東北学院大「震災の記録プロジェクト」で編まれた。

日本民衆史に残る被災の体験

東日本大震災の記録
3・11 慕哭の記録
著者：金菱 清編
出版社：新曜社
定価：2940円

（評）色川 大吉（歴史家）

